

## 幼年教育研究施設のあゆみと大学院幼児学専攻設置の経緯

広島大学名誉教授 森 楸

中坪 森楸先生が幼年教育研究施設（以下、幼研）に赴任されたのはいつですか。

森 1971（昭和46）年4月です。

中坪 幼研設置が1966（昭和41）年4月ですから、ちょうど5年後ですね。1967（昭和42）年9月に「幼児の数概念と言語に関する発達の研究」と題する報告書が出されており、これが後の『幼年教育研究年報』の前身だと思うのですが、この報告書によると柴谷久雄先生（教授）、祐宗省三先生（助教授）、丸尾譲先生（助手）がスタッフだったのですね。

森 そうです。幼児教育学部門しかなかったのです。

中坪 祐宗省三先生は、幼児教育学部門のご所属だったのですね。

森 幼児教育学部門の助教授でした。当時、祐宗先生は、実験心理学の研究者として学会では知られていたのですね。特にマウスを使った実験などをやられていたので、日本保育学会のときなど心理学者で幼年期の子ども研究の先駆者であった平井信義先生からよく冷やかされておられたようです。実験心理学でネズミをやっている、どうして幼児のことが分かるのか…ということですね。でも、附属幼稚園長になって、幼児と直接接するようになってからの祐宗先生は違います。この報告書は、大変身される以前の時期のもので全く心理学的なものですね。この研究の中心は祐宗先生だと思います。

中坪 丸尾譲先生が助手ですね。

森 丸尾先生は、西洋教育史の専門で、荘司雅子先生の弟子です。教授の柴谷久雄先生は教育哲学です。当時は幼研として共同研究の形をとった論文を年1回ほど出しており、私が赴任したときも、自分の専門分野とは全く異なるテーマで共同研究に参加しているのがあります。

中坪 1969（昭和44）年3月に発行された『幼年教育研究年報』（第2巻）では、柴谷久雄先生（教授）、祐宗省三先生（助教授）、高旗正人先生（助手）がスタッフだったと記されています。このときは高旗先生が助手だったのですね。森先生は、1973（昭和48）年3月に発行された『幼年教育研究年報』（第5巻）で出てきます。

森 この論文はテーマなど全然記憶がありません（笑）。たぶんあまり関心のないテーマだったからでしょうね。高旗先生は教育社会学講座の後輩で古くからの友人の一人なのですが、私が赴任したときは井上勝先生（教育方法学講座出身）が助手でした。

中坪 助手がいろいろ代わっていますね。丸尾譲先生が初代助手で、高旗先生が次の助手、3代目が井上先生、1973（昭和48）年から利島保先生（実験心理学講座出身）と森川直先生の二人になっています。

森 高旗先生は教育社会学研究室の助手を2年やって、その後、幼研に来られたのです。森川先生は教育哲学講座の出身です。利島・森川両君が助手の時、私は助教授で幼児教育学部門には教授が居ない時代です。

中坪 このときの施設長が林美樹雄先生（教授）、そして祐宗省三先生（助教授）、森楸先生（助教授）、利島保先生（助手）と森川直先生（助手）という5人体制のようです。このときはもう、柴谷先生はいらっしゃらないのですね。

森 柴谷先生は1973（昭和48）年3月に定年で退官されていました。

中坪 柴谷先生は幼研創設から7年間だけですね。森先生が来られた1971（昭和46）年に、それまでの幼児教育学部門に加えて幼児心理学部門が新しく設置されています。

森 そこが大切なところだけでも、幼児心理

学部門設置の経緯については私はよく知りません。ただ、教育学科と心理学科から助手のポストを1名ずつ出して、それで幼児心理学部門を創ろうということになったと聞いています。当時、教育学科と心理学科は、助手のポストをそれぞれ7つか8つほど持っていたので、それを転用したのでしょうか。当時の教育学科と心理学科は教員養成学部にはない小講座制でしたから、教授・助教授・助手がそろって一講座だったのですね。

中坪 今では考えられません。

森 幼児心理学部門をつくろうという話は心理学科から出たのかもしれませんが助手のポストの振り替えて教授、助教授のポストをそれぞれ教育学科と心理学科から出すことでできたようです。助手のポストが減るので反対した人もいたと思いますが、当時は一部の実力者教授によって学部運営がなされていたのでできたのではないかと思います。いくら学部の発展だといっても、今だったらできないでしょう。私はそうしたポストの振り替えによって採用されたと言えます。幼児心理学部門の増設によって、その助教授に祐宗先生がスライドし、私が幼児教育学部門の助教授になりました。幼児心理学の教授として東雲分校から来られた林美樹雄先生は、広島文理科大学心理学科の出身で絵の研究をされていました。画家でもあったので私も個人として一枚いただきましたが、園長時代に附属幼稚園に寄贈して玄関を入ったところに飾っていましたから、まだ残っていると思いますが。

柴谷先生が辞められてから幼児教育学部門は、延々と助教授一人時代が続きます。当時教育学科では50歳までは教授にしないという不文律があって、教授のポストが空いているのに業績のある助教授でも昇格させなかったのですね。私も1971（昭和46）年から赤塚徳郎教授が定年になる1983（昭和58）年まで12年間助教授でした。赤塚先生の定年の年、私はちょうど50歳だったのです。広島大学では10年くらい前からですが、教授期間が15年以上ないと叙勲を推薦しない制度になりましたが、教育学の教授でこの条件を満たしている人は私の前後の世代では少ないと思います。現在は大講座制になっていますし、50歳縛りの不文律もなくなっているでしょうから、大部分は15年間以上の教授期間

があると思います。私の教授期間は13年間です。

中坪 森先生が来られた後、助手は2人いますね。

森 1973（昭和48）年に柴谷先生の定年退官で空席になった教授ポストを使って森川さんを助手に採用した時から2人になったと記憶しています。もう一人は、前年の1972（昭和47）年4月に井上先生が浜松にあった女子大学に転出された後、採用されたのが利島保先生ですね。

中坪 このときはまだ、大学院幼児学専攻が設置される前ですから、大学院生はいませんね。

森 幼研施設だけです。

中坪 研究だけです。いいですね。

森 でも、大学院生がいないと寂しいと言っていました。やはり大学院生がいないということは、研究を後継する人が育たないということなので、何とか大学院を設置したいと思っていました。

私たちは、幼研に採用されるとき、最初から大学院担当が可能かどうかの審査を受けているのです。そして教育学科や心理学科の大学院の授業である「特別研究」という授業に参加していました。私は、出身講座である教育社会学講座の「特別研究」の授業に、祐宗先生は、発達心理学講座の「特別研究」の授業に、それぞれ参加していたのです。大学院担当の資格審査は受けているわけで教育学部大学院担当の教官と対等の扱いですが、授業を持っていないと手が出ないという理由もあったと思います。当時、幼研に大学院を早く実現するには分属主義でいったらという意見も内々ありました。つまり幼児教育学と幼児心理学は、それぞれ大学院教育学研究科の中の教育学専攻と心理学専攻に分属して、そこで大学院の講座を創るという話です。今の教育学研究科はそうなのではないでしょうか？

中坪 はい。今とすごく似ていますね。

森 分属して大学院の講座を創ることは母体の了解さえあれば講座増として比較的簡単にできたかも知れませんが、私は分属主義という考え方には反対でした。幼児を対象として研究する

ためには、教育学も心理学も総合的に学ぶことができるようにしなければ大学院創設の意味がない。教育学専攻と心理学専攻に分かれていては、幼児を総合的に研究する大学院生が育たないと思っていました。私も若くて血気盛んな頃でしたから、あるときそんなことを教授会で発言したのです。このあたりの思い出や、今後の幼研への期待として「子ども総合研究所」への発展を望むといったことを『幼年教育研究年報』（第27巻）（広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設創立40周年記念号：2005年）に書きました。それから、私の定年退官記念事業の一環として出版した『ちょっと変わった幼児学用語集』（森林監修、1996年、北大路書房）の序文にも、1975（昭和50）年に設置された大学院教育学研究科「幼児学専攻」と自分とのかかわりを書いています。

先ほど述べた私の教授会での発言の話ですが、当時私は助教だったのですが、教授会の席上で「幼研にぜひ大学院を創って欲しい」と提案したのです。すると心理学科から出ていた当時の学部長が声を荒らげて「君は幼研を潰すつもりか」と怒鳴りました。

当時「大学院は学部教育の上に創るものである」という、いわゆる煙突式制度が常識でした。だから学部附属の研究機関で学部生を持たない幼研に大学院を設置するという発想はなかったのです。ですから、私の発言をどう勘違いしたのか知りませんが、「幼研を潰す気か」と学部長は言ったのです。私はボカンとして、どうして大学院を創ったら幼研が潰れるのか意味が分かりませんでした。

その後、文部省（当時）の方針や制度が変更され、学部教育を持たない研究所のような所にも大学院設置が可能になりました。煙突式制度でなくても良くなったのです。1975（昭和50）年に、大学院教育学研究科幼児学専攻が設置されたわけですが、当時、学部教育をもたないところに設置された大学院というのは、うちの幼児学専攻と長岡に技術系の大学院ができたように記憶しています。つまり大学院として設置されたけれども、その下には研究所のようなものしかなく、いわゆる学部教育に直結しない大学院が初めてできたのです。幼児学専攻は、そのはしりなのです。助教のくせに何を言うかと、私を恫喝した学部長は、たぶん時代の流れが全く読めなかった人でしょうね。逆に、もし幼研が大学院生を持たないままだったら、今ごろは

潰されていたのではないのでしょうか。

中坪 それはすごいですね。知りませんでした。大学院の設置申請は、1972（昭和47）～1974（昭和49）年ぐらいですね。

森 設置のための検討委員会は1～2年前からやっていたと思いますが、最終的には、1974（昭和49）年6月頃です。夏休みに入った7月だったと思いますが、全国附属幼稚園PTAの全国大会のようなものが長崎市で開催され、それに出席したあと、休暇を取って長崎の実家（島原市）に帰省していました。すると、文部省に出した設置申請の文書を修正しないといけないから、至急広島に戻るよにと呼び出され、慌てて帰ったことがありました。文部省から大学の本部事務局に最終質問が来たのではないのでしょうか。ですからあの頃、大学院設置に関する申請書類の多くは私が書きましたし、かなりの部分、かかっていたと言えます。

私の考えとしては、『ちょっと変わった幼児学用語集』の内容編成がそうですが、幼児の「教育」「心理」「社会・文化」それから「身体」を研究する、せめて4部門ぐらいは欲しいと主張していました。最終的には、文部省との予算上の兼ね合いで3部門（幼児教育学、幼児心理学、幼児保健学）になったのですが。文部省の質問は、教育学専攻と心理学専攻に大学院のドクター（博士課程後期）があるのに、なぜそちらに所属して幼児教育学や幼児心理学の大学院教育をやらないのかという、分属主義の立場に立った質問でした。

その回答書を作るために、「なぜ、幼児教育学や幼児心理学は教育学専攻と心理学専攻の下ではいけないのか？」「なぜ、幼児学専攻でなければならないか？」ということを文章にまとめるわけです。私たちが設置を目指した専攻は、幼児教育学専攻でも幼児心理学専攻でもなく、幼児学専攻なのです。ところがこの「幼児学」という用語を前例がない、となかなか認められないわけですね。だから「幼児学」とは何か、なぜ必要かを理解してもらうための説得の文書を書いたわけです。ポイントは、幼児を総合的に研究することのできる研究者を輩出することが大切だということ、つまり、幼児教育学、幼児心理学、幼児保健学の各分野が総合された「幼児学」という一つの専攻がなぜ必要か、その理由を書いたわけです。

余談になりますが、私は1965（昭和40）年に開設された立命館大学産業社会学部の創設スタッフとして採用されましたが、当時の末川博立命館大学総長に直接聞いた話ですが、文部省は「産業社会学部」という名称を前例がないという理由でなかなか認めてくれなかったそうです。「日本はこれから産業社会として発展するのだから、この学部が必要だ」と総長自ら文部省に行って説得されたそうですが、認めてもらうまでは大変苦労したと話されていました。前例が一つできると、その後次々と「産業社会」を冠した学科や学部、さらに大学までもできたわけですが。

「幼児学」もよく似ています。「幼児学専攻」は、いま全国にある「子ども」学科や学部の先例になったのではないのでしょうか。ほとんどの子ども学部は、幼稚園教諭や保育士を養成していますよね。幼稚園や保育所が主な就職先になっています。実質的には幼児学部であり、幼児学大学院ですよ。

話を元に戻すと、幼研の2講座は附属施設だから別に主幹講座を創りなさいという文部省の指導もありました。そこで幼児保健学を主幹講座にし、医学部の小児科教室から清水凡生先生に来てもらったわけです。だから形式上は、幼児教育学と幼児心理学は協力講座になっていました。幼児学専攻がなくなるとともに、協力講座という名称も消えていると思います。

中坪 1975（昭和50）年4月ですね。

森 ところが1975（昭和50）年の幼児学専攻開設当時、幼児教育学部門には教授が居なかったのです。だから助教授だけで申請したのです。今では考えられないことですが、当時の文部省の解釈では、助教授が大学院指導能力を有する（マル合）なら学生の指導は実際にはできるでしょうから開設後に教授ポストを埋めてくだされば結構です、ということでした。すごいですよ。

しかもそのとき、文部省は、修士課程だけでなく博士課程もついでに設置してはどうですかと言ったそうです。ところが、こちらの誰が言ったのか分かりませんが、学年進行に伴って改めて申請しますと答えたのだそうです。人のいいのにも程がある、と言いたいですね。文部省の言うとおりに同時に申請しておけば、10年早く博士課程もできたはずですよ。ところが博士課

程の設置は1989（平成元）年まで待たないと実現しなかったわけですから、今思うとそれは大きな失敗です。それにしても、当時は幼児教育のブームみたいなものが社会的背景としてあったということがあるかもしれませんが、修士課程はそうやってすんなりできたわけです。

中坪 当時、国立大学の教員養成系の教育学部の多くが、幼稚園教員養成課程を設置していましたけれども、それとの関係もあるのですか。

森 広島大学には附属幼稚園は二つもあるのに幼稚園教員養成課程はありませんから、あまり関係ないと思います。それにしても、幼稚園教員養成課程がないにもかかわらず、附属幼稚園は二つあるのですから、全国的にも珍しい大学と言えるでしょう。幼研ができるとき、附属幼稚園は三原キャンパスにある附属幼稚園を広島に移転させ幼研の研究園にすることが学部教授会では決まっていたのですが、文部省に行った段階で地元出身の有力政治家の力が働いて、三原の附属幼稚園はそのまま残ったのです。広島の附属幼稚園の新設は「オレが何とかするから、三原の附属には手を付けなくてくれ」ということだったようです。これは当時の学部長が、附属幼稚園の記念誌に書いていることで周知の事実ですが。

中坪 すんなりと修士課程ができたのは、研究者養成が目的ですか。

森 ホンネとしては研究者養成が目的です。だけど申請書には、学問的素養を備えた専門的なハイレベルの実践者養成も謳っています。カリキュラムとしては、幼児教育の実践にも通じる研究者を養成するために、幼稚園へ行って大学院の単位を取るような授業科目も設けました。具体的には「幼児学実地研究」という授業です。実践現場とタイアップして、実践に強い研究者を育てたいという思いで単位化したのです。それから「幼児学総合研究」という授業も提案しました。幼児を総合的に研究するための幼児学専攻なのだから、幼児教育学講座と幼児心理学講座が別々に特別研究の授業をするだけでなく、幼児保健学講座を含めて3講座が合同で一緒にやる授業を単位化しようということですよ。この「幼児学総合研究」は、今も残っているのですか。

中坪 カリキュラム上はなくなりましたが、今でも定期的に、幼児教育学講座と幼児心理学講座と一緒に授業しています。通称「総合特研」と呼んでいます。

森 略称として各講座でやるのを「特研」、3講座合同でやるのを「総合特研」と呼んできたのですね。中坪さんが大学院生のときは単位化された授業として「幼児学総合研究」がありましたか。

中坪 ありました。

森 「幼児学実地研究」もありましたね。

中坪 ありました。

森 この二つの授業は、当時としては革新的なアイデアでした。いまは一般的になっていると思いますが、当時の大学院としては革新的なシステムだったわけです。

それから、国立大学附属幼稚園で行政地区が異なる地域へ移転したのは、広島大学しかないのです。これも革新的なことです。広島大学は、附属学校園が11あるわけですが、附属幼稚園だけが大学のメインキャンパスである鏡山（東広島市）に移転しました。それは初代幼研施設長の柴谷先生の功績によるところが大きいです。

中坪 附属幼稚園を鏡山（東広島市）に持ってきたことですか。

森 そうです。大学の総合移転は、私が広島大学に着任する以前から論議されていて、その後正式に決定しました。五日市の石内と可部と東広島の3カ所の候補地のうち、どこへの移転を希望するかという教授会での投票もありました。私は広島市に残る案に投票しました。でも「夢の100万坪のキャンパス…」みたいな情報がばらまかれてしまって…。広島大学が広島市内に残っていれば、もっと良い学生が集まったと思いますよ（笑）。

中坪 同感です。ホント広島市内に残っていれば…（苦笑）。

森 広島市内に残って建物を高層化すれば良かったのですよ。今の受験生は、広島大学はな

かなか受験したがりないでしょう。雪は降るしアルバイトもないし…まあこれは余計なことですが（笑）。

中坪 附属幼稚園が鏡山（東広島市）に移転したことについて、もう少し教えて下さい。

森 広島大学の鏡山（東広島市）移転が決定したとき、附属はどうするのかという論議を柴谷先生が園長の頃に全学の附属校園長会議で何回も論議しているのです。柴谷先生は、「附属幼稚園は学部と一緒に東広島に行く」その一言で決まったそうです。柴谷先生は県立和歌山中学の出身で広島文理科大学教育学科を卒業されたのですが、他の教授連中にとっては近づきがたいエリートで、しかも有言実行タイプの方でした。祐宗先生も柴谷先生の前ではピリピリされていて苦手なようでした。あの有名な新堀通也先生は、あまり物を言わない方で、いつも下を向いて歩かっていたのですが、柴谷先生は廊下で出会うと「新堀くん、君は先輩に挨拶もできないのか？」と詰問されるような厳しい人です。バートランド・ラッセル (Bartrand A. W. Russell) の平和と教育の哲学的な考察で学位を取られた学問的にもすごい先生です。

私はどういうわけか気に入られていました。柴谷先生は、朝5時ぐらいに起きて6時か7時頃には研究室にいられていました。そして夕方5時前には帰宅されるのです。昔は、幼研のすぐ隣に戦後すぐ建てられた教員宿舎があったのですが、木造の小さな宿舎に奥様と二人で住んでおられました。

私は今もそうですが夜型で、当時朝の出勤も9時を過ぎるのですが、その時間には柴谷先生は一仕事終えられていました。そこで柴谷先生の研究室で朝の挨拶の後、毎朝のように1時間ほど雑談をするのが日課になっていました。先生は話が上手だし、話題が豊富で、いろいろな話をしてくれました。おかげで耳学問を相当しました。頭は切れるし、論理が明快だし、講演で話されたものを文字化すると修正しなくてもそのまま立派な文章になるような方です。ドイツ語も自由に読める方でしたし、外国の文献もたくさん買っておられました。

定年退職された後、奈良のご自宅に伺ったことがあるのですが、大きな一部屋が書庫になっていて、その中に移動式のスチールの書架が入っていました。1973（昭和48）年頃という半

世紀近く前の話ですから、その頃自宅に、図書館にあるような移動書架があって洋書がずらっと並んでいたというのはすごいことです。残念ながら、柴谷先生は定年退職後、わりと早くに亡くられました。私が助教授の頃だったと思います。奈良であったお葬式で幼研を代表して弔辞を読みました。赤塚先生も定年後比較的早く亡くされましたが、そのときも岐阜のお寺で弔辞を読みました。前任教授お二人の弔辞を書いて、葬儀で読んだ人は、ほかにはあまりいないのじゃないかな。

中坪 赤塚先生はいつ頃登場されるのですか。

森 赤塚先生は、博士課程申請要員として来られたのです。人柄もいいし博士の学位もあるということで、岐阜大学からお出でいただいたのです。1977(昭和52)年だったと思います。ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) の教育思想の研究をやっておられました。しかし、博士課程後期の申請の結果、文部省の審査委員会を通過できず、学年進行に伴う博士課程はできないで10年ほど修士課程のまま過ごすことになったのです。

中坪 博士課程が設置されたのは、1989(平成元)年ですね。

森 それはもう背水の陣だったのです。そのときは幼児教育学、幼児心理学、幼児保健学の3講座で教授3名、助教授3名がそろっていました。赤塚先生が定年になり、幼児教育学部門は私が教授に昇任していました。

中坪 1975(昭和50)年に修士課程ができ、学年進行に伴って博士課程ができていれば、1977(昭和52)年にできるはずなのに、1989(平成元)年にできたということは、予定より10年以上遅れているわけですね。

森 1989(平成元)年、教育学部と福山分校が一緒になりました。当時はまだ、広島市南区東雲に学校教育学部がありました。当初、教育学部が鏡山(東広島市)に移転する順番は、全学で最後の予定だったのですが、福山分校キャンパスには水畜産学部(生物生産学部)があり、これが工学部の次に移転するということになり、教育学部福山分校も一緒に移転しないと跡

地の国有地が売れないということで急に移転が早まったのです。結局、工学部に次いで、全学では2番目に教育学部が移転することになりました。教育学部と福山分校が一緒になると、教育学研究科で博士課程をもたない修士課程は、幼児学専攻だけになってしまいますから、統合移転する平成元年までにとということで背水の陣だったのです。

中坪 この頃、幼児教育学講座は森先生が教授で、鳥光美緒子先生が助教授ですね。

森 そうです。鳥光さんは福岡教育大学から来てもらったのです。

中坪 幼児心理学講座は、祐宗先生が教授で、山崎晃先生が助教授ですね。

森 そう。幼児保健学が清水先生と井上先生ですね。当時大学院新設の審査では、3講座以上に「マル号」の教授・助教授がいないと認められない制度になっていました。ところが幼児学には、幼児教育学講座、幼児心理学講座、幼児保健学講座と3講座しかないわけです。5講座あって3講座以上がマル号というのなら余裕がありますが、われわれの幼児学専攻の場合は、すべての教官が審査に通らないと駄目ということになります。つまり全員が「マル合」でなければなりません。これを逃すと4年後には祐宗先生は定年になるし、この点でもまさに背水の陣だったわけです。そういう厳しい条件でしたが、審査委員の先生方からも評価されて博士課程が認められ、本当にほっとしたものです。肩の荷が下りたというのは、こういうことを言うのでしょうか。修士課程しかない10年あまりの間に、積極的な学会発表や卒業生の活躍などもあって評価されるようになったのだと思います。

中坪 こうして1989(平成元)年、無事に博士課程が設置されたわけですね。そこで修士課程と呼んでいたものが、博士課程前期・後期に変わったのですね。

森 博士課程が設置された1989(平成元)年は、教育学部が東広島に移転した年でもあるのですね。この年の大学院生は、例年より多かったように記憶しています。

中坪 博士課程ですか。

森 7人入ってきたのは修士課程の14期生です。博士課程の1期生は、移転後の1989（平成元）年4月入学で、他大学で修士課程を修了して受験した七木田・湯澤・玄の3名だけです。修士の7名は「僕たちは引っ越し要員として必要だったので入学させてもらった学年だ」と言って、ひがんでいました（笑）。みんな引っ越しの手伝いで、助手の統率のもとダンボールに本を詰めたり、荷物を運んだりしてくれて大いに助かりました。汗を一緒に流したせいかな、あのクラスは所属講座に関係なく印象深いクラスです。幼児学専攻の教員と院生がいっしょになって、ソフトボールやバレーボールなどの球技をワイワイ言いながら楽しんだりする楽しい時代でした。

話を元に戻しますが、申請に当たってはカリキュラムもいろいろと工夫しました。他専攻と異なる点は附属幼稚園と教育・研究の両面で連携を深めたことです。そのためもあって附属幼稚園も鏡山（東広島市）に移転したわけですから。附属幼稚園で教育学部生の教育実習をはじめたのは私です。教育学部では当時は中学校・高等学校の教員免許しか取れませんでした。彼らにも附属幼稚園で教育実習ができるようにしたのです。当時私は学部の教育実習委員会委員長だったので、それができたということもあります。今でも残っているかもしれませんが、教育実習のガイドブックとして実習生に配る「実習ノート」を初めて作ったのです。その序文は私が書きました。教育学部では広島高等師範学校時代からの伝統で、中等教員の免許状しか出さないのに附属小学校での実習が、私の学生時代も義務化されていましたが、小学校よりも幼稚園のほうが本当の子どもの姿が分かるのではないかというのが私の主張でした。それを実証するために、附属幼稚園との共同研究で「実習ノート」を分析したり、アンケート調査を行ったりしました。その結果、私の主張を裏付けるデータが出ました。

中坪 幼研が広島市中区千田町のキャンパスにあったときは、附属幼稚園と同じ建物でした。1990（平成2）年に鏡山（東広島市）に附属幼稚園が移転しましたが、大学キャンパスの中ではありません。これについて経緯は何かあるのでしょうか。

森 私たちは、附属幼稚園を大学キャンパス内に建てるべきだと言っていました。今の体育館やテニスコートがある西北の角辺りに附属幼稚園を建ててほしいと要求しました。でもそれは通りませんでした。事務局サイドの全体的な設計図の中には入っていませんでした。その後、附属幼稚園建設予定地として、(1) 山中池周辺、(2) 現在の附属幼稚園の裏山の反対側で墓地の近く、(3) 現在の附属幼稚園の場所の3カ所が提案されました。わりと平坦で開けているのは山中池周辺だったのですが、結局はこの場所に落ち着きました。当時は、祐宗先生が園長でしたので、祐宗先生が事務長などと相談して決められたと記憶しています。附属幼稚園の先生方、幼研のスタッフが3カ所を見学しましたが、場所の決定権はありませんでした。私は祐宗先生の次の移転時の園長で、場所の最終決定については当時の園長と学部事務長、それに本部事務局あたりでやったようです。直接関連のある現場の幼稚園の先生と幼研教員の意見は聞くにとどめたということでしょうか。

現在地は背後に大きな山があり、今はその山が保護者の協力もあって園児の遊び場として整備されているようですね。年々「森の幼稚園」として自然を生かした保育実践と研究が大いに発展しているようで、結果論としてはキャンパス内でなくてよかったかもしれません。大学本部の施設課のほうで園舎や園庭の設計を行ったわけですが、設計図では山裾の平地だけが園のキャンパスで、後ろの山との間には高いコンクリートの塀を建てて山には入れないようにしていたのですね。「こんなことでは西条の田舎に引っ越し意味はない。自然環境が活用できるから移転するのだから、裏山との境界は全部取っ払ってくれ」と強硬に申し入れました。園長の気迫に押されたのか分かりませんが、それからは本部事務局の担当者はこちらの意見をよく聞いてくれて、園舎の設計図も現場の先生方の希望を入れてかなり手直ししてくれました。当初購入が計画されていた既製のブランコや滑り台やジャングルジムなどは要らないから、代わりに県北から出る檜の間伐材を利用した檜を建ててくれという希望も聞いてくれました。これは遊びの幼児教育論に基づく私の持論でもあったわけですが。裏山には、何十万円もするブランコや滑り台などの固定遊具に代わるものが無数に自然環境としてあるわけですから、貴重な国費の有効活用にもつながったわけですね。

移転に際して難しかったのは、地元の東広島市内の私立幼稚園とどう調整するかということです。子どもの数は減っているのに、新しく幼稚園ができると、子どもを奪い合うことになるからです。私が客員教授として勤めていたくらしき作陽大学が去年、附属幼稚園を創りましたが、地元の私立幼稚園が反対して定員も随分減らされました。私は全くタッチしていませんが、必ずそういうトラブルが起きるのです。ただでさえ園児が少なくなっていくのに、大学の附属幼稚園ができたら私立幼稚園にとってはお客様である園児を取られてしまいますから。

中坪 死活問題ですね。

森 まずは東広島市内の私立幼稚園の園長さんたちに附属幼稚園の移転をどう理解してもらうかという難題でしたが、難波元實先生（さざなみの森認定こども園）の大きな協力もあって思うよりスムーズに行ったと思います。

中坪 現在も行われている「ひがし広島幼児保育研究会」も、そういう流れの中で森先生が立ち上げられたのですか。

森 附属幼稚園が東広島に来てくれて良かったと思ってもらえるように、地元に戻元できることをやりますと約束していましたから。その一つが「ひがし広島幼児保育研究会」です。幼稚園の先生だけでなく保育所も含めて東広島市の保育者の資質向上につながることを一緒にやりましょうということで研究会を発足させました。それが昭和の終わり頃だと思います。移転前です。

中坪 昭和から平成に変わる頃ですね。

森 東広島の園長さんたちと一緒に食事会を開き、顔合わせすることから始めました。難波先生は好意的だったので良かったのですが、そうでない方もいました。今でもその時の場の情景を思い浮かべることができます。全国の国立大学附属幼稚園がこれまで（広島市）とは異なる行政区（東広島市）に移転するという例は、全国的にもないわけですから、うまくいくかどうか不安でした。東京教育大学（筑波大学）の附属をはじめ大阪や福岡教育大学など、大学のキャンパス移転があっても附属は全然動きませ

ん。広島大学だって附属幼稚園を除く10ある幼・小・中・高は、今もってどこも動きません。広島大学でも、私の在任中に東雲地区の附属を東広島に移転させようという動きがありましたが、同窓会や政界などの反対があってポシャってしまいました。これは全国の大学どこも似たような状況があって移転できないのだと思われます。その中であって唯一、附属幼稚園が移転できたのは、先ほど述べたように柴谷先生の「うちは行く」という一言が大きかったです。普通なら「幼稚園だけが先走りすると附属の足並みが乱れて他の附属校が迷惑する」という反対意見が出て、長々と論議ばかりやって結論が出ないということになると思います。ところが柴谷先生の発言に対しては蛇ににらまれた蛙みたいに、他の校長は何ら反論できなかったと聞いています。それほど威厳のある方だったのです。

中坪 それはもともと幼研施設と附属幼稚園が一心同体だったからですか。

森 私までは幼研施設長が同時に附属幼稚園長でしたから一体化していましたね。今はこれが崩れていますが。建物も同じ2階と1階だったし、スタッフは毎日顔を合わせ、行事なども一緒にやっていたし。当時は教育学部附属でしたが、大学附属になってからも変わりませんでした。外部からも幼研の附属だと見られていたようですね。元々の成り立ちはそうですね。

実際には、教育学部移転と附属幼稚園移転は違う話ですから、分けて考えることもできたのですが、私は一緒に移転して良かったと思います。他の学校園が学部と一緒に移転しなかったのは、いろいろな理由があったのでしょうか。教育学部移転の予定が急に早まって準備期間が少なかったこともあるかもしれませんが、それは今では理由になりません。学部はとうに移転しているのですから。

しかし学部と附属との教育・研究の連携を真剣に考えれば、附属は学部の近くにある方がいいに決まっています。近くにあるべきだと考えます。医学部から来られた幼児保健学の清水教授がよく皮肉を言っていましたね。「教育学部の先生は附属がなくても研究できるのですね。医学部では附属病院がそばにないと医学の教育も研究もできませんけどね。子どもがいなくても教育の研究ができるのが教育学なんですね」。



この問いに真剣に答えようとするれば、政財界の圧力など跳ね返せるとは思います。その馬力やエネルギーを持った強力なリーダーがいないということですか。

**中坪** さきほどの、修士課程設置よりも博士課程設置に時間がかかったという苦労話ですが…。

**森** 修士課程設置のときは、教育方法学講座の吉本均先生が幼児学専攻新設の検討委員会委員長で、幼児学専攻を創ることでは学部全体の協力体勢がありました。幼研から祐宗先生と私が委員で出ていましたが、私たちの提案したカリキュラムをほとんど取り入れてくれました。

問題は博士課程でした。博士課程の設置は、修士課程の時のような委員会を作らず、実質的には当該専攻と学部長にすべて任されていました。だから博士課程の設置が遅れたのは学部内に反対があったといった問題ではなく、文部省が委嘱していた審査委員に関係しており、いわば外部の問題だったと言えます。幼児学専攻に博士課程ができなければ、他のすべての専攻に博士課程があるのに、幼児学専攻だけが修士課程しか持たないことになってしまいます。修士課程しか持っていなかった学校教育学部と統合する前のことです。

**中坪** けれども今は、「幼児学専攻」もなくなりました。

**森** 私たちの苦労が水の泡ですよ。幼児について総合的に学び、研究するという初期の目的が、制度上は空中分解したみたいですね。幼児保健

学も消滅し、教育と心理に分かれた分属主義になってしまったわけですが、幼研は幸いなくなっていないわけですから「幼児学」専攻を創設した初心の志をもう一度思い起こして頂き、運営面では幼児を対象にした総合的な研究のできる専門馬鹿でない研究者を養成していただきたいと思います。垣間見るところ、私たちが目指した初心は忘れられていなくて、頑張っておられるようには思いますが。

**中坪** 私たちはこれから、森先生の過去のご苦労を理解し「幼児学専攻」設置の意志を受け継いでいかなければいけません。

**森** しっかりやってください。大いに期待しています。

**中坪** 今日は貴重なお話をありがとうございました。

## プロフィール

**森 榊（もり しげる）**

広島大学名誉教授（教育学博士）。1932（昭和7）年、長崎県に生まれる。広島大学大学院教育学研究科博士課程修了。広島県立保育専門学校、立命館大学産業社会学部を経て、1971（昭和46）年から広島大学教育学部附属幼儿教育研究施設幼児教育学部門に勤務。1996（平成8）年3月定年退官。その間、広島大学評議員、広島大学附属幼稚園長、広島大学教育学部附属幼儿教育研究施設長、附属学校部長を兼任。日本保育学会、日本教育社会学会、日本子ども社会学会の理事を務めた。